

# 山根幸夫先生の思い出

大木 康

私が明代史研究会に参加するようになったのは、大学院の修士課程に進学した一九八一年のこと。明代文学研究を志しつつ、小説読者の問題など、社会的な関心を抱いていたことから、かつて研究会に参加しておられた薄口雄三先生、田仲一成先生にご紹介いただいたのであった。当時は「惠安政書」を読んでおり、続く「令梅治状」、そして「後鑑録」「神説」の頃まで出席した。

漢文訓読の方法によって相当なスピードで資料を読んでゆくやり方は、はじめての経験であり、その読みの深さ、精確さに心を打たれた。最近「水滸伝」を読んでいて「府尹把高侯斬了二十脊杖送配出界放東京城裏人民不許容他在家宿食」なる文章があった（第二回）。高侯が若い頃、杖刑を受け、都から所払いになった一節である。中国で出された何種類かの標点排印本を見ると、いずれも「發放」の後に逗号（読点）を打っている。しかし、金聖歎本が「發放東京」以下の部分に圈点を施していることよって明らかのように、「出界」の後に逗点を打つべきであり、「發放」は下にかかるのが正しい。そこで幸田露伴の訓読訳を見てみると、この部分「送配して界を出し、東京城裏人民に發放して、他を容れて家に在き宿食せしむるを許さず」と読み、「發放」に「ふれ。いひつけ」と注をつけている。漢文訓読にとつて弱点であるはずの白話文でさえ、訓読で読んだ方が正しい場合が往々にしてある。

結局中国語と漢文訓読の両刀をきちんと使えなければだめなのだというのが、現時点での結論である。明代史の会を通して、訓読の達人技を目の当たりにできたことは、とてもよい経験だったと心から感謝している。

ほかにも研究会を通して学んだことは計り知れない。地方志に親近感を抱くことができたのもその一つ。八十九種明代、三十三種清代などの伝記資料索引では検索できないような人物の伝記も、地方志にあたることでずいぶん「発見」することができた。

私が自分の論文をはじめて発表したの、『明代史研究』誌上である。修士論文を書き終えた後、山根先生から『明代史研究』に何かご発表になりませんか？とお勧めをいただいた。はいとお答えすると、薄いマス目が印刷された用紙を手渡された。なにしろ手書き原稿がそのまま印刷されるわけだから、ずいぶん緊張して版下を作った。印刷の段階で縮小されることを考えて、マス目いっぱい文字を書くのが「こつ」だったと後から知ったものの、はじめてのことゆえ、漢字の書き取りの要領で、マス目の中に小さく文字を入れてしまい、そこだけずいぶんちぎりました。ペーシ面になっていた。一九八四年の第十二号「明末における白話小説の作者と読者について」がそれである。

上海の復旦大学に留学中、日本から来られた宋代史専門のある先生にお目にかかった。『明代史研究』に論文があります、と自己紹介したところ、「あ、それ読みました」とのこと。いろいろお教えを受けることができた。『明代史研究』誌が、明代研究者ばかりでなく、実に広く読まれていることを実感した。

明代史の会で忘れられない思い出は、毎年行われていた旅行である。各地の著名な図書館見学をメインとして、その他さまざまな見学が組まれた旅行は楽しい限りであった。私は一九八三年の

天理図書館、一九八四年の米沢市立図書館、一九八六年の足利学校への旅行に参加した。天理図書館では応接室に招かれ、司書の金子和正先生から「何かごらんになりたいものはありますか」とのこと。なにごとにもずうずうしい私は、「酔翁談録」と「三遂平妖伝」の書名を申し上げたところ、しばらくしてほんとうに机の上にこの二書が置かれたのには、びっくりした。この貴重書を間近に拝見できたことは、幸せというよりほかはない。その後、これらの本には、ガラス越ししかお目にかかっていない。この時の天理では、天理教の詰所に宿泊した。白飯にみそ汁と沢庵だけの朝食だったが、この朝食がとてもおいしかったことを今でも覚えている。

米沢へ行った時には、齋藤茂吉の生家である上山の山城屋旅館に宿を取ったことが忘れられない。館内の一角には、茂吉の資料が展示されていた。翌日は齋藤茂吉記念館や、明清の堆朱の美術館蟹仙洞などを訪れた。私の机の上には、お気に入りの堆朱のペン皿が置いてある。堆朱なるものの魅力を知ったのも、この時のことであつたと思う。

留学中の一九八五年、長春にご滞在中であつた山根先生をおたずねし、長春でごちそうになった。こまも忘れたい。山根先生が、中国をはじめ海外の研究者との交流に力を注がれたことは、よく知られていよう。山根先生のご尽力によって復旦大学歴史系の呉傑先生が東京に滞在しておられた時、山根先生からお電話があつて、呉傑先生を東大へご案内してほしいとの依頼を受けた。東洋文化研究所の助手をしていた頃のこと。呉傑先生の後について、当時法学部長であられた鹽野宏先生をはじめとする何名かの先生方をおたずねし、合間に構内を散策した。呉傑先生はもと東大のご出身。母校を訪問された機会に、いろいろ有益なお

話をうかがうことができたのは、ありがたいことであつた。当時、明代の出版研究に手をつけはじめたばかりの頃で、明代における書舶本の存在、その重要さなどにつき、呉傑先生から教えていただいた。二度目にお目にかかった時、「ほんのお礼ですが」といって、ていねいな楷書で墨書された文章を頂戴した。「東京再訪の記」とでも題すべき文章で、宿舍の近くにあった関口の芭蕉庵を訪ねては、芭蕉と杜甫の詩境を論じ、また四十年を隔てて東大を訪れた際の思い出が記され、末尾には私への謝辞も記されている。山根先生のご縁によって手に入れることができた貴重な宝物である。最近、明末清初の文人冒襄が、生涯の間に師友たちから贈られた詩文集めた『同人集』をひもといているが、文人たちの文章贈答の現場を経験させてもらったわけである。その呉傑先生も一九九六年に世を去られた（『明代史研究』第二十五号に山根先生による「呉傑先生を偲ぶ」がある）。

広島大学に赴任し、また東大に戻った後も、さまざまな場面で山根先生からのご指導を受けてきた。昨年のある朝、本郷三丁目の駅でお目にかかり、途中まで一緒に歩いたのが、直接お目にかかった最後になってしまった。先生は東大病院に向かわれるとのことであつた。「具合がよくないんです」といわれ、心配であつたが、その後も『明代史研究』や『東方文化事業の歴史』など、次々お送りいただいております。相変わらずのご健筆ぶりに接していただいていたので、まさかこんなに早くお別れの日が来ようとはとても思えなかったのである。大島立子先生から山根先生がお亡くなりになったと連絡をもらった時には、耳を疑った。まだまだお教えいただかなかねればならないことはたくさんあつたのに。

心からご冥福をお祈りいたします。  
(東京大学東洋文化研究所教授)